

# 引込線 2013

## 【作品配置図】

### 1Fおよび敷地内

- 1 **前野智彦** | Stage of Uninhabited/island Season1-Episode Final  
2013 | 汚水処理設備・DHMO 他 | 約130m<sup>2</sup>
- 2 **戸谷成雄** | 洞穴の記憶  
2011 | 木・灰・アクリル | 185×140×77cm
- 3-1 **登山博文** | 方形  
2013 | アクリルウレタン・麻布 | 148×126cm
- 3-2 **登山博文** | 逆光  
2013 | アクリルウレタン・麻布 | 170×160cm
- 3-3 **登山博文** | 四本の線  
2013 | アクリルウレタン・麻布 | 140×115cm
- 3-4 **登山博文** | 緑と柿色の形  
2013 | アクリルウレタン・麻布 | 140×120cm
- 3-5 **登山博文** | 歪な正方形  
2013 | アクリルウレタン・麻布 | 134×120cm
- 4 **箕輪亜希子** | 迂回路  
2013 | channel4 video installation | 可変
- 5 **伊藤誠** | 土星  
2013 | 油土 他 | 80×130cm
- 6-1 **富井大裕** | 黄色い垂直さん  
2012 | 水準器・バイス・クランプ | 191×22.5×55.5cm
- 6-2 **富井大裕** | 青い垂直さん  
2013 | 水準器・バイス・クランプ | 197×22.5×54.8cm
- 6-3 **富井大裕** | 灰色の垂直さん  
2013 | 水準器・バイス・クランプ | 192.6×22.5×55.5cm
- 6-4 **富井大裕** | 青い垂直さん#2  
2013 | 水準器・バイス・クランプ | 189×22.5×56cm
- 6-5 **富井大裕** | 赤い垂直さん  
2012 | 水準器・バイス・クランプ |

- 187.5×22.5×50.5cm
- 6-6 **富井大裕** | 青い垂直さん#3  
2013 | 水準器・バイス・クランプ | 190.8×22.5×56.5cm
- 6-7 **富井大裕** | 銀色の垂直さん  
2013 | 水準器・バイス・クランプ | 191×22.5×54.9cm
- 7 **益永梢子** | カップ1杯  
2013 | 小麦粉 | 約120×15cm
- 8-1 **荻野僚介** | w802×h1115×d30  
2013 | アクリル絵具・キャンバス | 11.5×80.2cm
- 8-2 **荻野僚介** | w802×h802×d26  
2013 | アクリル絵具・キャンバス | 54.5×47.5cm
- 8-3 **荻野僚介** | カラー  
2013 | アクリル絵具・キャンバス・パネル | 90×90cm
- 8-4 **荻野僚介** | w653×h803×d22  
2011 | アクリル絵具・キャンバス | 80.3×65.3cm
- 8-5 **荻野僚介** | w971×h1302×d25  
2010 | アクリル絵具・キャンバス | 130.2×97.1cm
- 8-6 **荻野僚介** | 1.2kg  
2010 | アクリル絵具・キャンバス・パネル | 18.5×180.0cm
- 8-8 **荻野僚介** | or stupid  
2011 | アクリル絵具・キャンバス | 145.4×97.0cm
- 8-9 **荻野僚介** | w727×h909×d26  
2013 | アクリル絵具・キャンバス | 90.9×72.7cm
- 9 **利部志穂** | 雨のない街  
2013 | アルミニウム・磁石・LED・給食調理器・不要となったもの 他 | サイズ可変
- 10-1 **倉重光則** | 明滅するスクエアー (不確定性正方形)  
2013 | プロジェクター・DVD・音 | 展示空間スペース
- 10-2 **倉重光則** | 赤い時空 (不確定性正方形)

- 2013 | ネオン | 展示空間スペース
- 11 **水谷一** | ねんねんころりよ おころりよ 坊やはよい子だ ねんねしな 坊やのねんねんのその暇に 糸取りはた織り染め上げて 三つのお祝い 三つ身着せ 五つの祝いに四つ身着せ 七つ本裁ち裁つからは つくせ世のため人のため  
2013 | 所沢市立第2学校給食センター内冷蔵庫及び冷凍室・テキスト掲載のボード・タイトル= 埼玉県の子守唄(寝させ唄) / 出典: 日本子守唄協会ウェブサイト | ボード=1189×841×5mm・冷蔵庫=490×509×245cm・冷凍室=509×250×245cm
- 12 **益永梢子** | 在庫する絵画・絵画する在庫  
2013 | ベニヤ板・ペンキ | 約600×100cm
- 13 **眞島竜男** | お尻川  
2013 | 紙・FRP | 60×70×100cm
- 14 **遠藤利克** | 空洞説一浴槽・身体  
2013 | 木・鉄・廃油・タール・(火) | 170×150×300cm

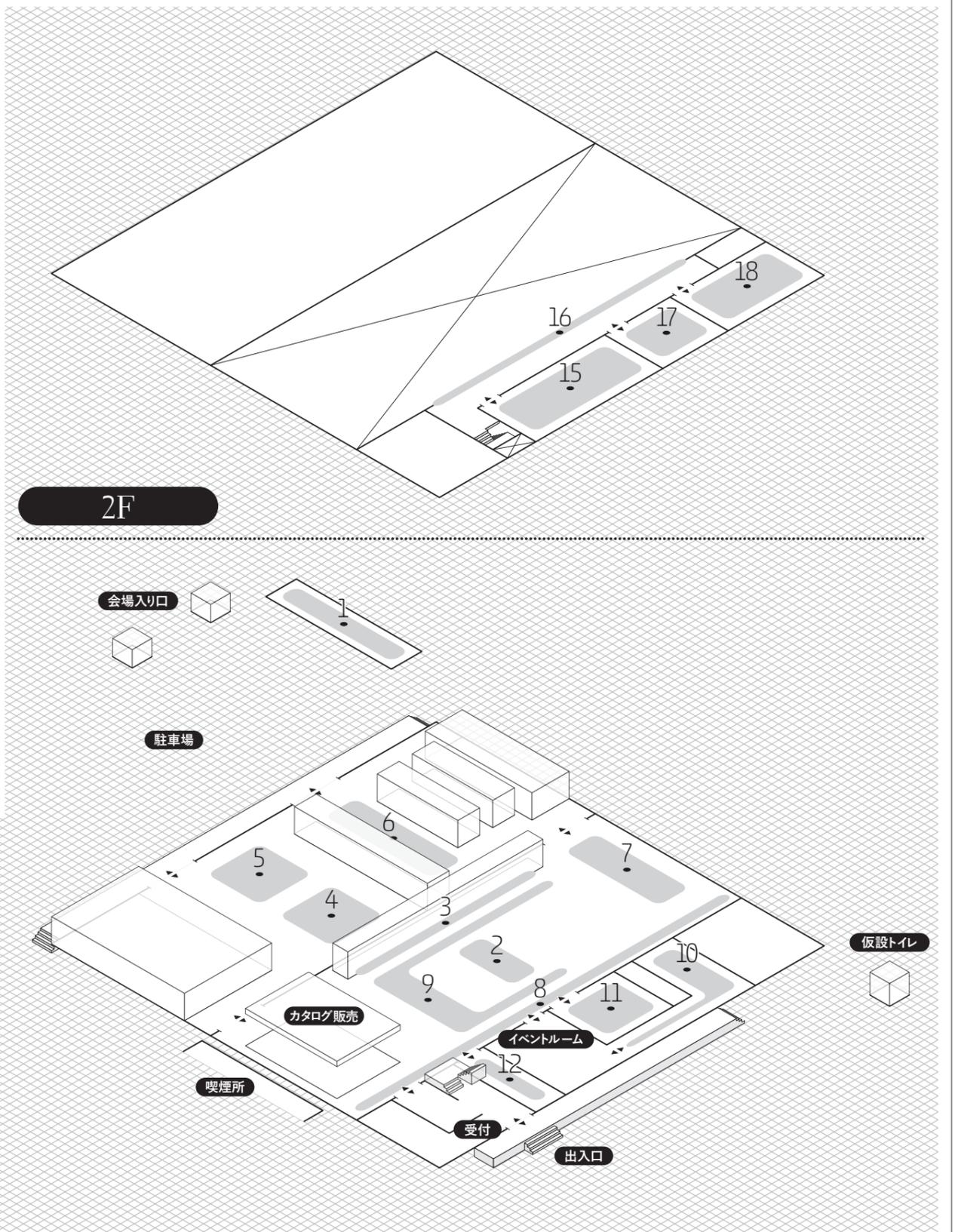
### 2F

- 15 **鷹野隆大** | 原因と結果  
[撮影: 木暮萌・喜多悠介・鷹野隆大]  
2013 | ビデオ・DVD | テレビモニター数台
- 16 **豊嶋康子** | 紙  
2013 | 丈夫で明るい障子紙 | サイズ可変
- 17-1 **中山正樹** | BODY SCALE (furniture and body)  
2013 | ポリエステル樹脂・木・スリムライト・和紙 | 330×110×55cm
- 17-2 **中山正樹** | BODY SCALE (2013-#3)  
2013 | 木・アクリル絵の具 | 70×55cm
- 17-3 **中山正樹** | BODY SCALE (2012-#1)  
2012 | 写真 | 108×92cm
- 18-1 **末永史尚** | Untitled  
2013 | パネルに顔料・アクリル | 44.5×168.5cm
- 18-2 **末永史尚** | Untitled  
2013 | パネルに顔料・アクリル | 54.5×47.5cm
- 18-4 **末永史尚** | Tangram Painting (Tile-A)  
2013 | キャンバス・パネルに顔料・アクリル | サイズ可変(60×60cm)
- 18-5 **末永史尚** | Tangram Painting (Tile-B)  
2013 | キャンバス・パネルに顔料・アクリル | サイズ可変(60×60cm)
- 18-6 **末永史尚** | Tangram Painting (P'Tile)  
2013 | キャンバス・パネルに顔料・アクリル | サイズ可変(60×60cm)
- 18-7 **末永史尚** | 旧所沢市立第2学校給食センター2F休憩室  
2013 | 合板・木に顔料・アクリル | 44.6×25×12cm
- 18-8 **末永史尚** | カップヌードル  
2013 | 合板・紙粘土に顔料・アクリル | 10.5×8.7×9cm
- 18-9 **末永史尚** | ミルクカーターの三角  
2013 | 合板・木に顔料・アクリル | 7×7×4cm
- 18-10 **末永史尚** | ミルクチョコレート  
2013 | 合板に顔料・アクリル | 16.3×7.5×1cm
- 18-11 **末永史尚** | 名刺500枚

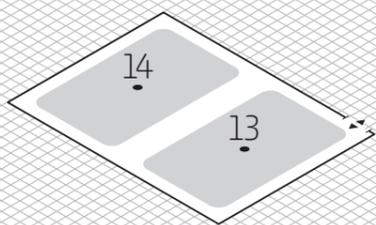
- 2013 | 合板に顔料・アクリル | 9×5.5×5.2cm
- 18-12 **末永史尚** | Tangram Painting (Stripe-Pink)  
2008 | キャンバス・パネルに顔料・アクリル | サイズ可変(60×60cm)
- 18-13 **末永史尚** | Tangram Painting (Stripe-Uzi)  
2008 | キャンバス・パネルに顔料・アクリル | サイズ可変(60×60cm)

### ゼミナール給食センター

アーティストと批評家、キュレーターらによって企画・運営がなされる「引込線2013」の一セクションをなすイベントの総称。芸術をめぐるテーマが参加者有志により複数掲げられ、会期中ゲストを交えながら、それぞれの専門領域のプレゼンテーションと議論が重ねられていく。展覧会コンセプトとしての「内部刷新しつづける機構」を、ゼミナール給食センターもまた内包しており、協働作業としての参加者同士の対話によって、芸術を現在形へと更新し続けることが目的とされる。また、イベント以外でもこれまでの引込線の活動を紹介するスペースとして利用される。ゼミナール給食センター会場構成は、前野智彦が担当。



### 1Fおよび敷地内



# 引込線 2013

## 【作品ガイド】

### ●ガイド執筆

當眞未季+勝俣涼+森下賛良

[武蔵野美術大学芸術文化政策コース学生]

内田麻美子

[同大学芸術文化学科研究室スタッフ]



登山博文  
Hirofumi Toyama

Location no. 3



「絵画とは手段ではなく目的だ」と語る登山博文の作品は、何らかの具体的な対象を表現する記号的な存在ではなく、ただひたすらに「絵画である」ことを目指す絵画です。そこに具体的なモチーフは存在しません。構図を練ることもなく、下絵も描かず、完成図を想定せずに行われる「描く」作業は、作家自身ですら予想もしない「事故」を生み出しながら進んでいきます。描いては塗り潰し、そうして幾度となく塗り重ねられた絵具は、地層のように積み上がり、繊細な色面と真率な線を出現させます。それは「描くこと」に真摯に向き合う画家と絵画との、対話の軌跡なのではないでしょうか。【當眞】



前野智彦  
Tomohiko Maeno

Location no. 1



水槽や配管を複合して敷設された構造体は、複数の容器=プールを抱え、液体を汲み上げています。漂白され無菌化された実験施設のような体躯は、液体を処理する動力的な基幹構造(インフラ)としての機能を果たすかのようです。液体にまつわる写真やテキストによる解説が、併せて呈示されています。大仰な装置や、視認される限りでの液体の状態、視覚的・言語的に媒介された情報に直面して、観者=受信者がめぐらせるだろう様々な憶測は、ある認知的・感情的応答を具体的に組織してしまうのかもしれませんが。液体のフィジカルな作用は受信者から隔離され、防衛的に密閉されています。【勝俣】



戸谷成雄  
Shigeo Toya

Location no. 2



戸谷成雄の彫刻は、チェーンソーによって刻まれたダイナミックな表面を持ちながら、深沈たる神聖さを纏っています。表面に見られるミニマルなグリッド状の線と、内側から刻まれたアトランダムに錯綜するバロック的な線。原理的なものと装飾的なものとの交差によって生まれた微かな隙間からは、秘匿された箱の内部が覗いています。また二階からこの作品を観てみれば、その上部に存在する穴に気が付きます。ばかりと開いた洞穴は、表面を内部に、内部を表面に反転し、もう一つの世界像を生み出します。世界の真実は、あの微かな隙間に覗く反転した世界にこそあるのかもしれませんが。【當眞】



富井大裕  
Motohiro Tomii

Location no. 6



どこか愛嬌のある明快な美しさが、潔い程に真っ直ぐに立っています。水準器は本来、物体の地面に対する水平、垂直を測る道具なのですが、ここに直立する水準器は自らの垂直のみを計測しています。富井大裕は、既製品が元来備える機能や性質を、日常的な使用目的から引き離し、造形理論に転換し作品化してきました。通常それは既製品と「顔見知り」程度の関係性で行われますが、実はこの水準器は、より作家の近くに存在しています。それは作家の内的な欲望の対象であるのですが、しかしこの欲望すら客観的な存在として開示するその態度は、「作ること」への清廉さに貫かれています。【當眞】



益永梢子  
Shoko Masunaga

Location no. 7/12



益永梢子の作品は、囁きのような軽やかさで見慣れた世界の景色を明るく照らしていきます。《在庫する絵画・絵画する在庫》はかつて調味料の保管庫であったこの場所の為にだけに存在する作品です。今はもう使われていない筈の倉庫は、ひっそりと、しかし確かに息づいています。「在庫する」という言葉は商業の世界で使われる業界用語だそうですが、名詞であり動詞でもある「在庫」という言葉の性質は、益永の語る「ことであり、ものである」絵画のあり方と似ています。彼女の作品は、私たちのすぐ近くに親しく存在する「物質」であり、空間に相互に作用する「出来事」でもあるのです。【當眞】



荻野僚介  
Ryosuke Ogino

Location no. 8



荻野僚介はしばしば、作品自体の寸法のデータを作品のタイトルとして表記します。それ自身の即物的な限界(サイズ)を自己言及的に指し示す状況は、一枚の絵画が完結した領域として、自らを律しているようにさえ見えます。こうした性格は、キャンパスの側面にまで絵画的処理が等しく及んでいる作品群からも、明らかではないでしょうか。それ自身に固有の形態を備えたキャンパスという閉域の限界内で実現可能かつ有効な(同時に、それに依るかぎりは実現不可能な)手続きを見極めること。色や形態、あるいは画像が画面内で占める位置の決定は、タブローと密着して遂行されています。【勝俣】



利部志穂  
Shiho Kagabu

Location no. 9



利部志穂の制作は、そのつと直観的に遂行される作業が断続的に累積されながら進行していきます。磁石や金属といったモノが、すでにそこにあった空間と緊張する状況は、放置され機能を廃棄された遺物への関心に貫かれています。それらはかつての合目的的な使用に従事するのではなく、帰属するあてのない破片として目的から切断されているゆえにこそ、安定的な形態化に抵抗する事象として現前するのではないのでしょうか。作家は造形行為の強度ある運動の中に身体を投げ出し続けることを要請され、それに伴する時間的移行に密着した動態において、モノの骸は自らを登録しえています。【勝俣】



倉重光則  
Mitsunori Kurashige

Location no. 10



物質として自立することのない光を、私たちが日常において意識することは殆どありません。倉重光則は、作品という装置によって、ただそこに「光」が存在しているというありのままの事実を鑑賞者に知覚させ、感覚させることを仕組みます。作者が給食センターの壁との接触により立ち現されるのは、場が経てきた経験と、今まさに保たれている皮膚であり、それは人の指紋と同じく、そこでしか成立し得ないものです。明滅する光は、さらに、給食センターの未来への時間の継続をも示唆し、その来たる瞬間にみられる光は、過去にみた光と似て非なる真新しい光であることを予感させます。【内田】



水谷一  
Hajime Mizutani

Location no. 11



かつて冷蔵庫として使われていたこの部屋には、給食センターについて書かれているパネルが一枚。水谷の作品は場所そのものを主役にしています。部屋のなかには、彼の絵を描くときの所作にも似たひた向きな清掃作業によって当時の面影を覗かせています。綺麗に磨かれた扉は当時の冷凍室への入口です。密閉性は当時のままのため、外の音や光はほとんど遮断されています。暗闇のなかでは視覚的要素と想像力の産物の境界が曖昧になります。見えるものにも見えないものにも等しく心を寄せることで、今日に見えているものは、この場所のほんの一部に過ぎないことに私たちは気付けるのです。【森下】



眞島竜男  
Tatsuo Majima

Location no. 13



果たして、自分の頭に出来た池に身を投げることなど、出来るのでしょうか。「頭山」という落語は、頭に桜の木が生えた男を巡る不思議な物語ですが、眞島竜男の「お尻川」はこの「頭山」の続編とも言うべき物語です。「頭山」では、自らの頭の池に身投げした男は「死んでしまった」と告げられ幕を閉じますが、しかし「お尻川」では、男は自らの身体を上から下へと旅をしていきます。それは単純な降下ではなく、クライムの壺のように外部と内部が反転し、互いに陥入しながら進んでいきます。そこには不可解な反転を幾度も抱える、身体と空間との奇妙な関係性が存在しているのです。【當眞】



遠藤利克  
Toshikatsu Endo

Location no. 14



方形に構築された木製の容器は、燃焼され全体が炭化し、内部には廃油が溜められています。容器はそれが抱え込む「空洞」とこちら側の時空とを隔離するかのようになっていますが、異なる空間を境界づけるゆえにこそ、空洞は働くのでしょうか。私たちはこの距離に隔てられながらも、容器の深奥に、私たち自身の無意識の深奥が反転的に吸収され充実しているさまを目撃するのでしょうか。遠藤利克は燃焼という手続きによって、空洞それ自体を供養として捧げています。そのとき私たちが直面し干渉し合うのは、私たち自身にとっても他者であるような、自らの身体なのかもしれません。【勝俣】



鷹野隆大  
Ryudai Takano

Location no. 15



映像のなかで語られる「引込線」の理想型と私たちの目の前にある現実の「引込線」とのズレ。言語イメージの脳内変換と実際に表現された視覚イメージのズレ。彼が作品に込めた意図と鑑賞者の受容したものとのズレ。この映像作品は複数の原因と結果のズレを内包しています。裸の男性を室内で撮影することにより彼が表現してきた自己と社会との関係性を問い直させる写真作品の在り方と、今回の自己と他者(時には自分の内面)との間に発生する関係性とは、相通じるものが内包されていないのでしょうか。関係性は、原因と結果の差異を認識し、受け入れるところに在るののかもしれません。【森下】



豊嶋康子  
Yasuko Toyoshima

Location no. 16



二枚の窓ガラスの間で幾何学的な形態たちは大切なもののように保護されています。豊嶋は、窓のサッシを額縁に、ガラス面に挟まれた空間をガラスケースに見立てることで、ホワイトキューブで行われる展示手法を給食センターに発生させました。一方で、窓を神棚然とさせている御幣のような形態は窓の外に露出しています。直接触れられないために現前する神聖さと神聖さ故に触れることができないものが、あるいは額縁やガラスケースの向こうに広がる本来展示を想定していない空間が、重なり合って同一線上に見えるとき、展覧会というシステムそのものが透けて見えてこないのでしょうか。【森下】



中山正樹  
Masaki Nakayama

Location no. 17



多くの美術作品が人物を横断的に切断しているなか、中山が70年代半ばから制作しているBODY SCALEシリーズでは人体は縦方向に切断されています。棚を思わせる緑色に塗られた家具に密着する男性の右半身像は、ロープを用いたパフォーマンスにより生まれた軌跡を表現しています。一見相反するものが実は一つの身体の中に共存し得ることを暗示するかのようになり、具体的な生活感を示す家具と運動性を概念的に表現した半身の複合体は私たちの眼前に立っています。身体性を実感しにくい現代において、ありのままの身体を私たちに意識させる中山の作品は稀有な存在といえるのかもしれません。【森下】



末永史尚  
Fuminao Suenaga

Location no. 18



タイル柄のグリッドによって整然と区画された画面が、ある一定のルールに従って分断され、支持体ごと切り分けられることで、組み替えられ別の形態へと再編される絵画。末永史尚の作品は、制作上で課されるルール=統制を引き受けることで、かえってその統制下において選択可能な複数の形態をこそ際立たせるのではないのでしょうか。窓など所与の空間的条件に依る壁面上の構成を基礎としつつ、フォルムや色を編集して描いた絵画、あるいは品物をそれが従事する役割から引き剥がすかのように、色と形へと切り詰められた立体作品もまた、造形による「別」の形姿を見せるのかもしれません。【勝俣】